



皆さんは、日々の学習やレポート作成で「ChatGPT」や「Gemini」「Copilot」といった生成AIを使っていますか？

ここ数年で生成AIの性能は飛躍的に向上し、今や検索エンジンと同じくらい身近なツールになりました。「テーマを入力すれば数秒で整った文章を作ってくれる」という魔法のような便利さに、魅了されている人も多いでしょう。私も、これらの最新技術に触れること自体は、これからの社会を生きていく上で非常に重要だと考えています。

しかし、皆さんに強くお伝えしたいのは、「生成AIが出力したテキストを、そのままレポートなどとして提出（利用）することの危険性」です。便利な反面、生成AIの利用には大きく分けて以下の3つの重大なリスクが潜んでいます。

1. もっともらしいウソ（ハルシネーション） 生成AIは、膨大なデータを確率的に繋ぎ合わせて文章を作成しているだけで、内容の「真偽」を理解していません。 存在しない論文、架空の歴史的事実、不正確な数値を、さも真実であるかのように自信満々に出力することがあります（これをハルシネーションと呼びます）。AIの回答を鵜呑みにしてレポートに記載すると、虚偽の情報を発信することになり、学問的な信用を大きく損ないます。
2. 意図せぬ剽窃（コピペ）と著作権侵害 AIが生成した文章が、既存のWeb記事や誰かの著作物と酷似しているケースは決して珍しくありません。出力された文章をそのまま自分のレポートとして提出すると、「剽窃（他人の文章を自分のものとして発表すること）」と見なされる可能性が極めて高いです。大学において剽窃は重大な不正行為であり、厳しい処分の対象となります。
3. 機密情報や個人情報の漏洩リスク 一般的な無料版の生成AIサービスでは、入力したプロンプト（指示文）がAIの学習データとして再利用される設定になっていることが多くあります。未発表の研究データ、自分や他人の個人情報、アルバイトやインターン先の機密情報を絶対に入力してはいけません。 気づかないうちに、あなたの入力した情報が世界中の誰かへの回答として漏洩する危険性があります。



OpenAI



Gemini



Copilot

生成AIとの「正しい付き合い方」とは？

では、生成AIを使ってはいけないのでしょうか？そうではありません。重要なのは「思考をAIに丸投げしない」ことです。AIを「答えを出してくれる魔法の箱」として扱うのではなく、「自分の思考を深めるための優秀なアシスタント（壁打ち相手）」として活用しましょう。

アイデア出しのサポート：

レポートのテーマ決めで悩んだとき、複数の切り口や構成案を提案してもらおう。

構成の客観的チェック：

自分で書いた文章の論理展開に矛盾や飛躍がないか、客観的な視点から指摘をもらう。

表現の推敲：

自分の書いた分かりにくい表現を、より適切な言葉に言い換えるためのヒントを得る。



最終的な事実確認（ファクトチェック）を行い、一次情報をたどり、自分の頭で考え、自分の言葉で文章を紡ぐのは、他でもない「あなた自身」です。

また、講義によっては「利用を一切禁止する」場合や「特定の条件下でのみ許可する」場合など、方針が異なります。シラバスや講義の指示を必ず確認し、ルールを守って利用してください。生成AIは、正しく使えば皆さんの学びを飛躍的に豊かにする強力な武器になります。情報リテラシーを高め、AIに「使われる」のではなく、AIを「使いこなす」学生を目指しましょう。

【参考リンク】

- 文部科学省: 大学・高専における生成AIの教学面の取扱いについて（周知）
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2023/mext_01260.html
- 総務省: 国民のための情報セキュリティサイト（生成AIサービスの利用について）
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/cybersecurity/kokumin/
- 琉球大学の生成AIサービスガイドライン <https://www.u-ryukyu.ac.jp/wp-content/uploads/2023/09/24d2480c1e7aa390d164d4efb33f3df9.pdf>



ふちがみ しんいち
淵上 真一

日本電気株式会社 Corporate Executive CISO

NECセキュリティ株式会社 取締役

ベンチャー系システムインテグレータでのネットワークエンジニアを経て、専門学校グループを運営する学校法人に転職。

教員経験を経て、社外では司法、防衛関連のセキュリティトレーニングを手掛ける。2018年よりNECグループ全社セキュリティ統括を担当。

ISC2 認定主任講師、Cisco Networking Academy Instructor Trainer

情報処理安全確保支援士集合講習認定講師、北海道大学 客員研究員

サイバー安全保障人材基盤協会理事、日本情報経済社会推進協会（JIPDEC）

評議員、警察大学校嘱託講師、Hardening Project実行委員